

SSTR に初めて参加した。

参加するなら一人で走ろうと決めていた。子どもの頃、自転車で知らない道を見つけるたび胸を躍らせたように、誰にも縛られず、自分だけの冒険をしたかったからだ。だからルートも、できるだけ下道を選んだ。

日の出とともに平塚漁港を出発する。足柄を越え、富士山を眺めながら北上し、諏訪湖へ向かう。さらに安房峠を越えると、目の前には息をのむような北アルプスの景色が広がった。国道 471 号を走り、富山方面へ進む道のりは長かったが、その時間こそが旅の醍醐味だった。見知らぬ土地へ向かい、景色が少しずつ変わっていく。その感覚は、少年の頃に地図帳を広げながら思い描いていた冒険そのものだった。

午後 5 時頃、夕陽に染まり始めた千里浜へたどり着いた。潮風を浴びながら砂浜を走った瞬間、不思議と胸が熱くなった。気づけば私は、仕事や年齢を忘れ、ただ遠くを目指すことに夢中だったあの頃の少年に戻っていた。

翌日は復興の妨げにならないよう心を配りながら能登半島を一周した。どこまでも続く海、荒々しい岸壁、そして美しい能登の景色。その雄大さに何度も足を止めた。珠洲で食べた塩ソフトクリームの優しい甘さも、魚津の居酒屋でひとり味わった新鮮な刺身の旨さも、旅の景色とともに心に刻まれている。

帰りは往路とは異なる道を選んだ。能登から北上し、糸魚川、白馬、安曇野、松本、そして相模湖を経て平塚へ。旅は終わりに近づいていたが、不思議と寂しさはなかった。たくさんの景色と思い出を積み重ねて帰ることができたからだ。

日常に戻った今でも、エンジンをかける音を聞くたびに思い出す。千里浜の夕陽と潮風、そして胸の奥で確かに息づいていた少年の心を。

また来年も走ろう。

ゴールは千里浜かもしれない。でも本当に会いに行きたいのは、あの頃の自分なのだ。

